｜分科会 B｜【多文化共生】 講演、パネルディスカッション

多様性を活かした地域づくり
～“多文化”を地域の魅力に!～

■日時：11月13日(金)　13:00～14:30

<講　師>

神田　すみれ
愛知県立大学多文化共生研究所
客員研究員

<コーディネーター>

牧野　佳奈子
一般社団法人DiVE.tv代表理事
DiVE　CAFEオーナー

<ゲスト>

川口　ビバリ
フィリピン人　フィリピン人コミュニティ団体代表

小池　ソニア
ブラジル人　人材派遣会社勤務

西　マリ
ブラジル人　通訳/外国人支援団体スタッフ

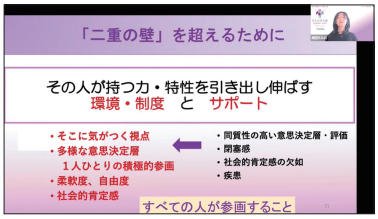
田島 フェルナンダ 由美
ブラジル人　人材派遣会社勤務

報 告 要 旨

報告者：河村　槙子（当日進行）

〔目的〕
外国人住民が増え続けている日本社会において、多様な人たちといかに共に暮らしていくか。その上で課題となること、逆にプラスとなること、多様であることの魅力について考える。 さらに、日本社会における外国人の課題をジェンダーの視点からも考察する。

〔内容〕
1．基調講演：講師　神田 すみれ 氏

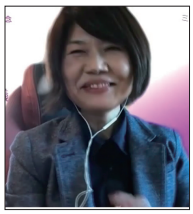


世界規模で移民が増加しており、日本においても同様である。その中で、外国人の非正規雇用の固定化、日本語指導、いじめ、不登校など子どもの教育の問題、生活文化の違いから生じる問題など様々な課題がある。

ベースとしてジェンダーギャップがある日本（G７で最下位）において､海外にルーツを持つ女性は､「外国人である」ことと「女性である」ことという「二重の壁」に阻まれている。

その人が持つ力、特性を引き伸ばす環境・制度とサポートが必要であり、一人ひとりの積極的な参画によって、多様な意思決定層が形成されることが重要。

2．パネルディスカッション
要旨：〈牧野氏〉
外国人と日本人がどういうところで接点を持つか、交流できるかを分析したが、外国人の関心ごとは、仕事関係が一番多く、地域のこととなると関心は低い。一方で、外国人が主催するイベントは愛知県にはたくさんあるが、そこへの日本人の参加者は少ない。その接点となるよう、それらイベントなどの取材、動画を作って配信する取り組みを行っている。



〈小池氏〉
子育てには苦労して、色々な制度を使ったり、学校の先生や近所の人の助けを借りてやってきた。仕事の寮などで日本の生活が始まると、なかなか近所づきあいがないが、今はその大切さを伝えるようにしている。まずはあいさつからはじめるのが一番良いと思う。外国人への情報発信については、紙ベースではなく学校でもメールやグーグルフォームなど、すぐに翻訳できるデジタル媒体を使ってもらえると多くの人が助かると思う。

〈西氏〉
保健センターで通訳として働いているが、周りに相談する人がいないということで外国人から様々な相談が寄せられる。通訳がいる地域はまだいいが、いない地域の外国人世帯はさらに苦労していると思う。外国人の子どもの場合、日本語習得が遅いのか、発達に遅れがあるのか分かりにくく、どうしたらいいか悩んでいる親も多い。
自分も富山県から愛知県に引っ越してきて友達もいない中、子育てをしていたが、みらいJr.という外国人向けの親子サロンが地域でやっていて、そこにいくことで友達ができて助かった。

〈川口氏〉
フィリピン人のコミュニティグループを立ち上げて活動しているが、親が夜の仕事をしていることで、子どもがいじめを受けるなどの問題や、高校、大学になかなか進学できない、進学しても中退してしまうなどの問題が多い。
市役所のサポートでコミュニティグループを立ち上げることができ、学校やfacebookを通じて仲間を集め、レクリエーションや支援を行っている。

〈田島氏〉
母親は日系人ではないブラジル人で、日本語が全く分からない中、日本の子育てに、すごく苦労していた。うつ病にもなってしまったが、病院で自分の思いを伝えることなど難しかったと思う。
現在、自分は外国人向けに仕事で使える日本語研修などの業務を行っているが、外国人は日曜日に家族と過ごす時間をとても大切にするため、研修は平日と土曜の夜間とするなど、生活習慣に配慮する工夫をしている。

〈総括・神田氏〉
海外にルーツを持つ、特に若い子育て中の女性に負荷がかかりやすく、メンタルヘルスケアの必要性も増えている。
そのような中で、サポートする側にもなっていくというのはすごいこと。
田島氏の外国人の習慣に配慮した研修の仕組みなどは、日本人には思いつかない、その人の特性や経験が活かされて仕組みが作られている事例であり、これからの多文化共生社会づくりのヒントとなる。
同質性の高い、偏った属性の人たちだけで仕組みを考えていては気づかないことが多い。会社や地域で、日本人ではない人が意見を言ったときに、それは大事なことだね、やりましょうと言える雰囲気を作る。そうする中で大きなストレスが無い社会を作っていくことが大切だと感じる。

3．運営総括

参加者からの質問も、文化習慣、教育、交流の機会など多岐にわたり、直接的に当事者の声が聞ける機会づくりの意義を感じることができた。一方で、論点が広がり、一つ一つを深く議論する時間は不足していた。今後も出演者の活動に関する情報発信や、意見交換等の機会づくりの継続も重要であると感じる。

●企画メンバー
河村　槙子　　板倉　恵美　　加藤　美幸　　佐藤　浩二　　出口　志穂　　内藤由美子　　阪野　優香　　藤中　崇矢
山口　真実